

テンゲルを聞こう！！

1991年、民主化・自由化が進むモンゴル国からホンホというロック・バンドが来日した。彼らは『チンギス＝ハーン』など「民族」を歌ったようだが、南モンゴル（中国・内モンゴル）にも民族のこころを歌うシンガーがいる。その名はテンゲル（漢字では「騰格爾」）。北はモンゴル国（ブリヤート・モンゴルでもたぶん知られているだろう）から南は台湾まで、モンゴル人が生きるところ、その独特の声をあまねく轟かせている。

彼の経歴をテープのレーベルから拾うと、

1960年冬、南モンゴル・イヒジョー（伊克昭）盟オトク（鄂托克）旗の遊牧民家庭に生まれる。1975～1985年、内モンゴル芸術学校、中国音楽学院、天津音楽学院などで、民族楽器のシャンズ（三弦）、指揮、音楽理論、作曲などを学ぶ。この間、『シン・ラマの交響曲』、『ムングン・ゴル（銀の河）』などを作曲。1985年より、 베이ジン（北京）の中央民族歌舞団で活躍。1988年、『ヒャンガン・ミン（我が興安嶺よ）』で、「上海・パリ世界音楽祭」の優秀賞を獲得。1989年、「全国流行歌曲演唱コンテスト」で10人の優秀歌手中、第一位を獲得。1990年、「ウランバートル 90年・世界大音楽祭」で金賞を獲得する。1991年、「第二回アジア音楽記念祭」において、『父と私、2人で』という曲で、中国部門の金賞を獲得した。同年7月、ウランバートルで、ソロ・コンサートを5回開催、大成功をおさめる。

彼はこれまでに、『フフ・モンゴル・ノタグ（蒼きモンゴルの故郷）』、『エー・ミン（お母さん）』などのテープをリリースしている。

さらに日本でも話題になった映画『紅いコーリャン』のテーマ曲『酒歌』も彼の曲である。また、台湾のテレビ・ドキュメンタリー番組『八千里の雲と月』のテーマを作曲し、歌もうたっている。台湾では唐山芸術団特別招請歌手という肩書きをもつ…という具合に、なかなか華やかだ。

南モンゴルを舞台に撮られた映画『ウルガ』の冒頭、「おじさんはなぜ漢人なの」という息子の疑問に、主人公ゴンボが答える、《Бид хятадын газартаан амьдраж байгаа монгол хүн шүү（僕らは中国に暮らすモンゴル人なんだよ）》。このセリフが表す様々な意味をこの映画ではあちこちに散りばめて表現しているが、テンゲルが創り出し、熱唱する歌の中にも中国に暮らすモンゴル人の思いがにじみ出ている。

例えば、《Монгол сайхан（モンゴルはすばらしい）》の冒頭、次のような会話がモンゴル人親子の間で交わされる。

父：ほなー、お父ちゃんとテレビでも見よか。ちょっとスイッチ入れてんか。

（漢語の放送が映り、漢語が流れる）

父：おい、おい、おい、モンゴル語の放送やがな、モンゴル語！

息子：お父ちゃん、モンゴル語の放送はおもしろくないでー。漢語のん、見ようや。

父：なんやてー。今日びの若いもんは……

わたしがフフホトに滞在していた1984年頃、テレビのモンゴル語放送は週に2回だけで、ドラマでは日本の「赤い疑惑（山口百恵、三浦友和）」やアニメの「一休さん」などを漢語から翻訳し放送していた（百恵や一休さんがモンゴル語で話していた!!）が、「モンゴル語のできる」モンゴル人に言わせると、表現も直訳調で、決して美しいモンゴル語でやっていたわけではなかったようだ。いまではモンゴル語放送も毎日になり、回数の点では改善されたが、果たして内容はどうか。ニュースも翻訳という作業はいるため、情報がおくれがちで、モンゴル人でも漢語のニュースを見ることが多いそうだ。このことは出版物についてもそうだが、漢語のメディアの方が質、量ともにすぐれている。

さらに、この会話はほかにもいろいろなことを示している。南モンゴル全体のモンゴル人の人口比率はほんの14%で、町ではさらに比率が下がる（南モンゴルの中心フフホトでは7%）。テンゲルの故郷であるイヒ・ジョー盟は代々チンギス＝ハーンの霊をまつってきたオルドス部族の故地であるが、ここでもモンゴル人はほんの11%である。漢人の流入は、時代とともにどんどん進んでおり、子どもは親の世代より一層、漢語に囲まれた環境で暮らすことになる。モンゴル語で授業し、伝統文化なども教える民族学校もあるが、大学に入る際、不利になるので親はあまり行かせない。このようにして、南モンゴルでは次第にモンゴル語を理解できないモンゴル人が多くなっている。自分の母語で日常生活ができない。自らの文化、言語が衰退していくのを目の当たりにしなければならない彼らの心情を「単一民族国家」などと思いこんでいる我が民族がどれだけ理解できるか……

モンゴル国のモンゴル人が、南モンゴルのことをХятад（中国、漢民族）と呼ぶのもこのあたりの事情が関係しているようだが、伝統的な遊牧生活をし、モンゴル文化を担い、モンゴル語で生活しているモンゴル人もまだまだ多くいる南モンゴルを十把一からげにってしまうのはどうか。モンゴル国が独立を勝ち取る際に、南モンゴル人のバートル（英雄）たちの血がどれだけ流されたことか。

古き良き草原でのすばらしい生活に比べて町の住みにくさを訴えた《ХҮН
ОЛОН БОЛЖЭЭ（人が多くなった）》の歌詞はこうだ。

あの頃、人は少なかった
あの頃、人は親切だった

食堂に入って、半日並んでいた（が、待ってもダメだった）
ちょっと話しかけようと思っても、口ごもってしまう（モンゴル語が通じない）

バスに乗ったら、汗がドッとあふれてきた
どろぼうや強盗に大切なお金を盗まれてしまった

買い物をしようとして危うく命を落とすところだった
許せないどろぼうの奴に人民元を盗まれてしまった

いなかの草原の広大さは、すばらしい
老人も若者もみんな笑っているのは、すばらしい
口げんかや騒ぎは、まっぴらだ
町はいま人が多くなった

草原で伝統的な遊牧文化にどっぷりつかって育ったモンゴル人にとって漢人が多数を占め漢化してしまった町は随分住みにくいところだと思う。フフホトでも私も1年間ここで過ごしたがやはり漢語がうまく使えないと住みにくい。まず町に出たらモンゴル語は通じない。モンゴル語の書籍を扱う本屋が数店、モンゴル人の家庭（ただし招待客がみなモンゴル語を話す場合のみ、そうでなければ、共通語としての漢語を使うのが普通）、まれにあるモンゴルの音楽のコンサート（歌舞団やオラーンムチルなど）会場など、ごく限られた場所である。モンゴル人の常食するもので町で手にはいるものはヘウィーン・チャイ（磚茶）くらいのもので、チャガン・イデー（乳製品）やモンゴル料理を出す食堂などもほとんどなかった。（ただし、今ではモンゴル食堂も何軒か営業しているということだ）

草原が、大勢で押し寄せてくる農民たちのスキによって次々に荒らされていく。漢地に近い東部モンゴルなどの草原はすっかり砂漠化してしまった。あのどこまでも広がる「豊かな」草原の土壌は、実は極めてもろく、いったん耕してしまうと1～2年は実りがあっても、その後どんどん砂漠化していく。美しい草原は、そんな自然の弱さと背中あわせにあるのだ。

《Энэ жил бас гандажээ（今年もまた干ばつだ）》

ボルハン・テンゲル（天神さん）は、一年を通じて雨を降らせてくれない
豊かで美しいわが草原がまたも干ばつに襲われている
黄色い（乾いた）風が吹きつづけている
灼熱の太陽が照りつづけている
かわいそうな我が家畜たちよ

鉄の網（鉄条網）が我が草原に張りめぐらされた
もと美しかった土地をバラバラに分断してしまった
何千何万の羊がいるのだ
盆地を見ながら立ちつくしている

かわいそうな家畜の草よ

日本のマスコミで取り上げられたクブチ砂漠には毎年、ポプラの植林に出かけるツアーが組まれ、多くの人が参加しているが、果たして、そこに生活するモンゴル人の視点があるのだろうか。強靱な生命力をもつポプラを植林することが、長い目で見たとき、本当にいいのか、悪いのか…。このクブチ砂漠はまさにテンゲルの故郷であるオルドス高原にある。

自らの故郷である南モンゴルをこころから思い、その現実を愁えているが、嘆くばかりでなく、自らの民族を非常に冷静に見つめ、かつての栄光の歴史におごり高ぶることに警鐘を鳴らしている。

《Монгол оюутан нарт (モンゴル人の大学生たちへ)》

モンゴル人は幸運を待っていてはダメだ
明晰な頭をフルに使っていきなさい
モンゴル人は歴史にあぐらをかいていてはダメだ
過去の出来事は
いまの我々には関係ないのだ
モンゴル人はモンゴル（の歴史）を誇っていてはダメだ
天の向こうには、また天があり
鉄の上にも青銅がある（上には上があるものだ）
モンゴル人は団結して繁栄に向かって飛びなさい
モンゴル人は自分が成すべきことを、成し遂げなさい

君主チンギスの名声・偉業は
冬の時代の氷に閉ざされてしまった
古き時代の蒼き御旗は
我々を再び助けてはくれないのだ